聞いてきました まちの声

表紙によせて VOL.17

星野村で燃え続ける「平和（原爆）の火」

山本（やまもと） 拓道（たくどう） 氏

１９４５年９月、故・山本達雄氏は広島の焼け跡にくすぶる原爆の残り火を親族の形見として星野村に持ち帰りました。多くの命を奪った「恨みの火」はやがて「平和を願う火」として星野村が引き継ぎ、７９年経った今も灯されつづけています。いまだに悲惨な戦争が起こる中、山本拓道氏（故人の子）平和への思いをお聞きしました。

お父様はどのように原爆の火を持ち帰られたのですか？

父は３度目の出征で広島市から１０ km 東の部隊に配属され、毎日任務で市内に通っておりました。８月６日は偶然にも一本遅い汽車に乗っていたことで即死を免れました。原爆ドームのすぐ近くで書店を営んでいた叔父さん（父を我が子のように可愛がってくれた）を探すなか、書店の地下で「その火」を見つけ、叔父さんの遺骨代わりとしてカイロに移し星野村に持ち帰ってきたと聞いています。

若い人たちにはどんな思いでお話しされていますか？

戦争は理不尽が多く、身の置き所もありません。感じ方は人それぞれですが、若い人たちがどれだけ「戦争」に思いを巡らせてくれるか、その思いで話をしています。
世界各地で戦争が起きていますが・・・。

「人間同士が殺し合う愚かなことは、もうそろそろやめないといかん」というのが父の最期の言葉でした。いまだに戦争が起こっていることは残念なことです。

講演を聞く子どもたちはどんな反応ですか？

ロシアとウクライナの戦争以降、子どもたちの反応は大きく変わりました。講演の中で原爆のことだけでなく社会情勢のことも話すと、自分たちにも何か出来ることはないかと積極的な姿が伺えます。同時に、世代の違う人に伝えることの難しさも感じていますね。

議会に対してのメッセージをお願いします。

地元や日本のことに留まらず、世界や更に大きな視点を持って、核兵器廃絶や恒久平和に向けた取り組みをしていただきたいです。

編集後記

熱中症、ゲリラ豪雨、線状降水帯、私の子どもの頃には聞いた事がない言葉ばかり。

朝は蝉の声で目が覚め、夜になると山沿いの川岸で蛍が飛び交う。そんな風情のある故郷の夏が今や驚愕と恐怖の夏に変わってきている。世界中を襲う異常気象。自然の力の前には非力な私達だが、予防と対策という抵抗は出来る。

変わっていく夏と向き合うには、子どもから高齢者まで防災に心掛け、健康管理を怠らず、毎日を過ごすことが必要不可欠ではなかろうか。

いつかまた情緒豊かで風情のある八女の夏が戻って来る事をひたすら願っている。

（小山　和也）

発行責任者
議長　橋本　正敏
広報委員会
委員長　古賀　邦彦
副委員長　水町　典子
委員　服部　良一
委員　高山　正信
委員　小山　和也
委員　原田　英雄
委員　久間　寿紀
委員　坂本　治郎
委員　花下　主茂

議会を傍聴しませんか？

次回定例会

8月28日（水）予定

八女市役所議場 午前10時から

八女市議会事務局23−4922

ヒアリングループ受信機（※）を貸し出しています。

※難聴者の聞こえを支援する機器で、音源の音が直接耳に届き、はっきり聞こえます。

発行／八女市議会 編集／広報委員会
〒834-8585 福岡県八女市本町647番地
TEL 0943(23)4922

※この広報紙は環境に配慮した再生紙を使用しています